

# 『金島書』に見える能登の神をめぐる

——「能登の名に負ふ国つ神」小考——

山吉 頌平

世阿弥が佐渡で著したとされる『金島書』に

は、世阿弥が佐渡へと配流された際の航路が、「海路」として譚い物にまとめ上げられている。世阿弥を乗せ、日本海をゆく船は、加賀を過ぎて能登沖を進む。「なを行末も旅衣、能登の名に負ふ国つ神、珠洲の岬や七島の、海岸遙かにうつろひて……」(表章、加藤周一校注『日本思想大系二十四 世阿弥 禅竹』(岩波書店、昭和四十九年)による)。

能登半島を巡り、富山湾へと世阿弥一行は進むわけであるが、この「能登の名に負ふ国つ神」とはいかなる神(社)であらうか。

能勢朝次は、『世阿弥十六部集評釈 下巻』(岩波書店、昭和十九年)において、「能登郡明神野にある能登生国玉比古神社と同郡能登部村にある能登比咩神社を指したものであらう。能登といふ名を持つ国の神の意」と註した上で、この句が縁語・「珠洲(鈴の岬)を導く序詞として機能していると指摘した。『大系』補注もこの「国つ神」解釈を踏襲しているが、「ただし両社とも能登郡で、珠洲とは縁が薄い。」

として位置関係から不審を表している。

『評釈』『大系』が挙げる両社は、能登生国玉比古神、能登比咩神という在地の国つ神を祀る式内社である。しかし、こうした式内社であっても古来からの伝統を保持しながら鎮座し続けているとは限らない。

『延喜式神名帳』に載る能登生国玉比古神社に比定される神社は、三社ある。すなわち能登生国玉比古神社(気多本宮、現七尾市所口)、同じく能登生国玉比古神社(現中能登町金丸)、能登部神社(現中能登町鹿島郡)である。候補の数あるということは、この場合は中世以降、古伝が途絶えるか、或いは兵乱などで一時的であれ神社が弱体化・廃絶し、式内社を勝手に称する社が出現・並立して今に至っているということである。

『評釈』が指すのは所口の神社だが、『大系』補注がいうように、珠洲の岬を過ぎた地点に鎮座するので、解釈には無理が生じる。かといって、他の二社が該当するかというところとは考えにくい。式内社・能登生国玉比古

神社の比定地については、加賀の国学者、森田平次の『能登志徴』や式内社研究会編『式内社調査報告 第十六巻 北陸道二』(皇学館大学出版部、昭和六十年)などで考証が行われているが、未だ決定的な答えが出ておらず、世阿弥配流時に、「能登の名に負ふ国つ神」と認知されるほどに連綿と伝統を守っていたかどうかは不明である。中世の能登式内社に関する史料はほとんど残っておらず、近世まで下るものの比較的古い承応二年の本奥書を持つ『加能越式内等旧社記』(小倉学他校注『神道大系 神社編三十三 若狭・越前・加賀・能登国』(神道大系編纂会、昭和六十二年)による)では、同社を現在中能登町金丸に鎮座する社だとして、「旧伝云、当国々魂之神而、祭神多食倉長命也、故今称二多気倉社一」と記している。この金丸鎮座説の当否はさておき、「能登」を冠した社名が一貫して受け継がれていたわけではないようだ。また、いずれの比定地にしても、内陸部に鎮座し、海路より眺望できるほどの標高に鎮座するわけでもない。『金島書』に記されるには文章の構成の上からも、その知名度からもそぐわぬように思われる。

能登比咩神社は、古来より現在地に鎮座し、前田家よりの猿楽の奉納や、能面七面が伝来するなど、芸能とかかわりの深い社ではあるが、やはり内陸部に所在し、世阿弥が『金島書』に書き記すほどに目立った神社だったとは考えにくい。

では、「能登の名に負ふ国つ神」とは何れの

社か。

まず我々は「能登の名に負ふ」という語句の解釈自体を考え直すべきだろう。「能登の名に負ふ」とは、「能登」という国名を社名に含んでいる、という意味ではなく、能登の有名な、という意味だと解釈するのである。

能登の著名な国つ神というところ、能州一宮気多神社(気多大社)がまず想起されよう。田中聡は、「佐渡への道、佐渡からの道」『日本海交易と都市』(山川出版社、平成二十八年)所収の中で『金島書』にみえる世阿弥の配流の道のりを、中世の佐渡への航路の例として取り上げ、そこで示した北陸の地図に「能登の国つ神」を気多社として記している。しかし、その論拠などは記されていない。稿者も同意見であるが、ここでその理由を述べていきたい。

気多社の祭神は大己貴命、代表的な国つ神である。古くは『続日本紀』以下の国史にも神職の選任や奉幣の記事が見え、また『日本三代実録』には貞観元年の従一位への神階の昇進が載るが、記紀神話に載らぬ地方神としては特異な高位であり、『延喜式神名帳』にも、名神大社として記載されることから、古くより中央において神威が知られていたことがわかる。中世においても、『真言伝』には承平・天慶の乱に際して広田社と気多社の神が共に賊軍討伐に加わったという伝承が載り、『神道集』にも気比・気多は兄弟神といった異説が記載されるように、その存在は注目され続けていた。また、当時流布していた三十番神

信仰において、五日の守護神にあてられていたことも見逃せない。世阿弥に縁の深い大和国とのかかわりでいえば、東大寺二月堂の修二会の神名帳奉読では、気多大菩薩が十二番目に読み上げられるが、これは第一番目に金峯山大菩薩、二番目に八幡三所大菩薩、その後、後に東大寺境内鎮座の神々、と続いた直後、気比大菩薩の次で、熊野や住吉などの諸社に先立つ順番である。その由緒については詳らかにしえないが、大和での気多社の存在感は決して小さくはなかったことが窺える。

また「能登の……前後に記される、白山や珠洲の海、立山や砺波山などは、『万葉集』以来、和歌に詠まれ、中世の『歌枕名寄』にも項目として立てられているように歌枕として定着していた。近在の「俱利伽羅峰」(俱利伽羅峠、砺波山中)も、『平家物語』で合戦の舞台となった名所であり、麓の砺波の関もまた著名な歌枕であった。気多社を詠む中世の和歌で管見に入るものはなかったが、「気多」という名を表出させないことは、歌枕で彩られるこの謡いに「気多」という歌ことばとはやや縁遠い詞を挿入することを回避するための巧みな臚化であったのかもしれない。

そして何よりも肝心な点は、気多社が海の近くに鎮座する、という点である。その近さについては、気多社にゆかりのある折口信夫が当社で詠んだ和歌を掲げれば諒解して頂けることと思われる。「気多の宮 蔀にひびく海の音。耳をすませば、聴くべかりけり」(『春

のことぶれ』)。世阿弥配流時の気多社の建築物については詳らかに知ることはできないものの室町後期には講堂や塔などの建物が立ち並んでいたことが「気多神社古縁起」より窺われ、現在のような海に面する大島居も、江戸後期には存在していたことが絵図から確認できる。加えて、本社の後方には、太古より鬱蒼と茂る原生林が存在するため、これらを世阿弥が目視し、強く印象を受けた可能性は高いのではないか。「雪の白山」を過ぎ、気多社へと至る順路は、加賀より能登へと至る船の航路とも合致し、またその後には「たなびく雲の立山や、明け行く天の砺波山……」と越中国内の名所が東から西へと視点を移して描かれるのは、能登半島北端を経て東岸を南下していく海路により得られる視点と考えられ、この情景が全体的に実景を踏まえて記していることを窺わせる。恐らくは、羽咋、輪島、珠洲、七尾などの港に停泊しながら進んだ航路を、一日の行程として凝縮したのであろう。また加賀より能登の海上に至り、まず一国を代表する大社を誦い上げ、七島、珠洲へと詞が続くのであれば、文章の流れからも、その格調からもふさわしいといえるだろうし、能勢朝次の序詞の役割という指摘が意味を持つようになる。

以上、「能登の名に負ふ国つ神」の語句について私見を述べた。大方の御叱正、ご教示を乞う次第である。(早稲田大学大学院生)